

# 神奈川支部情報

第15号 発行日 2010年4月23日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail

[kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp](mailto:kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp)

郵便振込口座 00190-2-114578

神奈川支部は3月13日、14日の2日間、かながわ県民センターで開催された「市民フェア2010」に参加して、連続して証言集会を開催しました。

13日は「山西残留」は軍命であった」と題して、稲葉積さんに証言していただきました。14日は97歳を迎えられた絵鳩毅さんに「撫順戦犯管理所の6年」と題して証言をしていただきました。両日とも60名定員の会場があふれるような状態で盛大に開催されました。

本号では稲葉さんの証言を特集します。稲葉さんは敗戦によって終わったはずなのに、山西省に残留させられてその後も4年近く、八路軍との戦争を継続させられてきました。そこでも激戦の中を命からがら生きのびて、共産党軍に捕まって大原戦犯管理所での人道的な待遇の中で「鬼から人間に」生まれ変わってこられたという大変な体験をされた方です。今回は「山西残留」の真実に迫るお話を中心にお願いしました。前回に引き続いて解説者に石田隆至さん（大学教員）と張宏波さん（大学教員）にお願いしました。

14日の絵鳩さん証言は次号で報告します。



## 「山西残留」は軍命であった

### 侵略戦争に引きずり込まれて

稲葉さん：稲葉です。これから私が戦争の中で体験してきたこと、今考えて

いることをお話します。

あの戦争は「聖戦」である、という認識のもとに私も中国への侵略戦争に参加してきました。その中で、その「皇

軍」という軍隊はどんな軍隊であったか。「聖戦」という美名のもとで実際は何をやってきたのか、ということについて今日は、第1の問題としてお話しします。

戦後65年も経っていても、自衛隊の幹部や、有名な大学の先生の中には未だに過去の戦争は「侵略戦争ではなかった」と公言している人たちが多いようです。その人たちもあの戦争の事実、犯罪の事実を深刻に受けとめて反省していただきたいと思います。

二つ目は、今日のテーマである「山西残留問題」です。これは現在の社会の中で伏せられている問題であります。というのは、山西省の太原でおきた問題ですが、当時第1軍の司令長官であった澄田睐（正確には「貝」へに「来」）四郎、参謀長の山岡道武と第2戦区の指令長官の閻錫山の3人によっておこなわれた戦後の日本に対する策略、謀略であったからです。そのために2千600人の軍隊が戦後も日本軍そのままの姿で残留して3年8ヶ月間、つまり山西省が中共軍によって陥落させるまで戦闘を続けてきました。その結果は、1945年8月までの戦争と戦後の2回にわたる戦争犯罪を犯してきたということなのです。

この2千600名の内560名が戦死しました。彼らは「祖国復興」の信念を信じて死んでいったのです。未だにその人たちの多くは戦場で野ざらしになっています。なぜ野ざらしになっているかということについても第2の問題として詳しくお話しします。

最初の問題から始めます。まず私の経歴を追って、私がなぜこのような戦争に引きずりこまれたのかということをお話しします。私は大正12年に東京池袋にあるお寺の次男坊として生まれま

大震災が発生した年で、東京は焼け野原になりました。そのとき火をつけたのは朝鮮人だ、と言って若い人たちが日本刀を振り回して朝鮮人へのたいへんな迫害を加えたという話はあとで聞きました。

次いで私が小学生のときには2.26事件のクーデターに遭遇しました。その模様を記憶していますが、家々では畳を全部上げて窓をふさいでいました。銃撃に備えるためでした。いまにも戦争が起きるのではないかというような不安な状態で過ごしました。ラジオは朝から晩まで「反乱軍に告ぐ！今からでも遅くはない、速やかに連隊に復帰せよ！」と何10回も繰り返して放送していました。

中学校に入ると、3年生くらいのときから軍隊から学校へ配属将校が配置されまして、階級は少尉だったと思います。それからは中学校でも軍事教練が科目に組み入れられました。中学4年生のとき、東京の中学の4年生が全員集まって富士山の裾野で、東西に別れて大演習が行われました。「最期の突撃」までやらされて、実際の戦争を想定した訓練が行われました。これが戦争のために体験した第1番目です。

その後私は出身がお寺だった関係で、お坊さんか学校の先生になるつもりで立正大学へ入学しました。その2年生から、学校へは夜に行くことになり昼は全員が軍需工場に勤めることになりました。私は伝手があつて海軍省の中の暗号書関係の仕事に携わりました。暗号書の仕事をしていると、当時毎日のように日本の船舶が沈められていく様子がわかりました。次から次と船がしずめられて、そのたびに暗号書が変わっていくのです。海軍省の暗号書には鉛のおもりが入っていて、船が沈め

られたら暗号書も一緒に海の底に沈んで、敵の手に渡らないようになっていました。

それでもどんどん暗号書が変えられて、私たちは舞鶴や佐世保へ暗号書を運んで、潜水艦に暗号書を渡す仕事もしていました。こうして大学3年になったとき、国の命令で「ペンを銃に持ち替えろ！」と言われて、学徒出陣となりました。学校も半年早く繰り上げとなって、3年生の途中（在学中）に徴兵検査を受けて私は第1乙種合格でした。「甲種合格と第1乙種合格者は現役入隊、第2乙種以下は予備役」といわれていたので私は合格組なので、入隊を待っていました。10月に半年繰り上げで卒業となりました。卒業後1週間位のときに赤紙＝召集令状が来ました。私たちは片方は「祝・出征」と書かれたたすき、もう片方は「武運長久」と書かれたたすきを掛けて学生服と学生帽のまま、当時甲府にあった東部第63部隊に入隊しました。

入隊して2カ月ぐらい初年兵教育を受けてすぐに中国へ渡りました。山海関を越えてその年の12月、中国侵略に参加しました。最初に着いたのが山東省の棗(ツバ)荘というところにある楓兵団の通信隊に配属になりました。ここで初年兵教育を受けたのです。まだその教育の途中だったのですが中隊長から幹部候補生の試験を受けろ、と言われて受けたところたまたま合格しました。ところが合格したとたんに殴る蹴るの暴力を振るわれて、歯が2、3本飛ばされるまで古年兵たちにいじめられました。毎晩のように倒れるまで殴られていました。

というのは、「軍隊は星の数ではない、飯の数だ、」「貴様は幹部候補生から帰ってきたら偉くなっておれたちをいじめるのだから、それができるように今

から十分に仕込んでやろう」、ということで特別に私はひどくいじめられました。そのとき考えました。内地での軍隊はこんなひどくはなかった。新兵をよく面倒見てくれた。なのに戦地へ来てみれば、なぜこんなに強暴になっているのだろうか、と。私は戦地の軍隊の凶暴性におびえて毎晩のように泣いていました。内地の軍隊とあまりにもの違いに驚いたことが第1の印象でした。

そのうちに、石家荘の石門にあった通信学校に入りました。1945年1月に通信学校を卒業して、卒業生はみんな見習士官として山西省の太原にある第1軍司令部に回されました。その第1軍司令部でそれぞれ各旅団に配属になりました。私は惇(正確には「山」へに「享」)県にあった独立混成第3旅団司令部に配属されました。同じ惇県にあった6大隊の部隊に回されて、そこに着いたらすぐにさらに3中隊と4中隊が警備している繁峙というところに最前線がある3中隊の小隊長として配置されました。

軍装を解かないうちのその夜作戦命令(呂号作戦)が出されて、そのままの姿で作戦に参加しました。繁峙の先は万里の長城になっていて長城を超えると蒙古地区に入るわけです。長城の手前のある地域に八路軍が進入している、ということでそれを駆逐するために呂号作戦が開始されました。

私たちはその日のうちに繁峙から大営鎮に進出しました。そのときの戦闘では小銃を撃ったのはほんの1、2回で、後はどこの部落へ行ってもみんな逃げて、住民は誰もいませんでした。部落に入る前に、遠くの山々にのろしが次々と上がっているのがわかるのです。我々が行く先々で、我々の動きを知らせているのですね。彼らは地雷を埋めて逃げていくのです。その時の作戦で

は地雷が敵だったのです。

部落に入っても誰もいない。そこで行われたのは、古年兵たちはよく知っていて、壁などを叩いて「ここにある」「ここにある」と壊した壁の中に隠してある、メリケン粉やチャンチュウ（白酒）など、お百姓さんたちが正月用に隠しているものを全部探し出してきます。たまに鶏でも見ると「ごちそうだ！」と言って捉まえるのです。

## 人を殺せないようでは！！

当時、寒い日は山西省では零下何十度となります。山の方は1メートル以上の雪が積もります。それだけ寒いところ。薪が足りなくなれば門柱を壊します。門柱に木も使っています。その木の部分を燃料にしました。このような略奪や放火、そんなことは日本軍が入った部落では全部やっていました。

そんなことを行って部隊に帰ってきたら「中隊長集合教育」ともっともらしい命令があつて、私にも来いと言われて参加しました。その集まりは、作戦行動の慰労を兼ねたもので毎日、夜になると「宴会」「宴会」で、大隊長以下将校が全部集まって飲んで騒いでいました。朝昼晩とも将校宿舎で食事をしていました。ある日、大隊長から「今日は初年兵教育がある。場外でやるから皆で見学しろ」ということで、我々も行きました。

そこで行われた初年兵教育というのは何であつたか。穴が掘られている前に中国人の捕虜が後ろ手に縛られて皆上半身裸で座らされていました。その捕虜に日本から来たばかりの初年兵に銃剣で刺突させたのです。怖がっている初年兵は後ろから叩かれて無理やり<sup>4</sup>に刺突させられました。命令の趣旨は、

軍隊に来て、人を殺したこともないような兵隊は使い物にはならない、だから経験をさせるのだということでした。

要するに人間性を持ち合わせていたら戦争はできないのだ、ということです。初年兵教育とは初年兵の人間性を奪って、人間を鬼にしてしまうことなのでした。これが日本軍の初年兵教育の本質だったわけです。

それだけではないのです。刺殺した捕虜たちの死体を今度は「押し切り」で首を落として、その首を城壁の門の所に並べたのです。城壁に出入りする人たちへの見せしめです。「八路軍に通じたら皆こうなるのだ！」、ということです。これが初年兵教育で見せられた事実です。これが皇軍の初年兵教育の実態です。

そのうちに大隊に新たに通信隊が設置されて私が初代の通信隊長になりました。通信隊の大隊本部の近くに兵舎を新たに造って通信任務を行いました。そのうちに河南作戦に入るということで、これは第1軍の旅団をかけた大作戦でした。その作戦に出るときは皆自分の爪、髪の毛を残して遺言状を書いてそれを大隊本部へ預けて行ったのです。そのような命令でした。私は書くことが思いつかないので、白紙に「南無妙法蓮華経」と題目だけ書いて大隊本部に預けて行きました。

この河南作戦は运城というところから出発して岔道口(ウツドウコ)というところまで作戦が行われました。黄河を渡って岔道口に行く途中で部落も何もない荒野に点々と白い小山があつたのです。こんな山の中で塩が取れるのか、と思っていました。たまたまその一つの「小山」の近くを通つたのでよく見たら、それは塩ではなくて、人骨だつたのです。人骨が風雨に晒されていて、頭蓋骨や手足の骨と分かるものもあり

ました。これが日本軍が運城地区で行った「三光作戦」の跡だったのです。全てを奪いつくし、すべてを焼き尽くし、すべてを殺しつくすという政策が行われた跡だったのです。だから部落も何もない荒野に点々としてあった白い塊はその残骸だったのです。

それを見ながら岔道口まで行きました。その岔道口ではじっさい一個中隊が全滅する負け戦となります。私たちは命からがら運城まで戻ってきました。安全地帯に入ってそのときロバ6,7頭に途中の部落から略奪した（白い反物）を積んで戻ってきました。さらにそこから太原まで戻りました。その太原で命令が下りて、関東軍が危ない状態にある、満州へ進出して関東軍を支援する、ということでした。そのために装備を変えるということで、服装からすべての装備を新しくして準備していましたが、そのときに敗戦となりました。

## 敗戦！ 武装解除もせず

敗戦となった場合は、本来ならばその場で武装解除となって全員が捕虜となって収容所に収容されるのです。ところが我々は武装解除はされませんでした。のみならず、大原の城内では次のような布告が出されました。

「日本軍は8月17日、戦争行為を停止した。しかしわれわれに対して挑戦する者や、鉄道、道路や通信線を破壊する者は敵とみなして断固としてこれを膺懲する。特にこの布告をもって強く一般に知らせる。ここに布告する。山西日本軍司令官」という内容で、あちこちに張り出されました。

敗戦となって武装解除されるべき軍隊が武装解除しないばかりか、日本軍がそのまま存在しているかのように、

刃向ったら敵とみなしてやっつけるぞ、という布告まで出したのです。なぜそれがやられたのかについては後でも述べますが、その前に皆さんも不思議に思われるでしょうから説明しておきます。日本軍と山西軍とは、戦時中から不戦条約が結ばれていました。山西は山西モンロー主義を唱えたりして国民党の中でも山西は特別の存在だったのです。だから戦争中は山西軍は「保安隊」という形で、日本軍と一緒に戦闘には出ないで日本軍が去った後の警備とか、歩哨が足りないところに保安隊をつけて補充するというように警備についていて、その保安隊は全て日本軍の命令で動いている状態でした。そのような状態でしたので、日本軍の命令が出ると当然日本軍には逆りません。

私たちは「原隊に戻って警備につけ」と命令を受けて、原隊のあった惇県に戻りました。そこで、旧日本軍の軍装で完全武装のままです。命令系統もそのまま存在していました。何かあればすぐに出動しました。日本軍が支配していたときとまったく同じです。

## 敗戦後の出動命令

実際にある日、こんなことがありました。部隊長から命令されました。「稲葉少尉、お前は20名の兵隊を連れて〇〇部落の八路軍を攻撃して、完了したらただちに撤退すること」、と部隊長から命令されました。ところが武装しているのは10名だけで、あとの10名は竹やりでした。日本刀もあったが日本刀と竹やりで戦争ができますか。笑止千番の話で、そのまま行ったら全滅させられます。そこで、出発するときは部隊長の検閲があるのでそのままの姿で出発して、裏から回って兵器班

のところから小銃、弾薬などの武器をもらって出て行きました。

目的の部落の手前で夜明けを待っていて、夜明けと同時にとにかく「撃て！」と撃たせたのですが誰も出てこないのです。誰もいない、と判断して「帰ろう」と帰ってきました。実際に戦争は終わっているはずなので、無理に突撃して命を落とすこともないし、実際に命令をしても誰も突撃はしないでしょう。私もそんなところで死にたくないし、そのまま戻りました。兵器班で小銃を返して、竹ヤリを受け取って、本部で「敵を撃退しました」と報告してそれで終わりです。そして竹ヤリも返納しました。終戦後の状況は、実際はこんな調子でした。我々は復員の命令が何時来るのかということだけを心待ちにしていたというのが現実です。

**石田さん**：今までの話は、敗戦後1年半くらいまでの従軍生活についての話をさせていただきました。稲葉さんは三光作戦をはじめいろんなことを体験されていますが、他の中帰連の方々も体験されたような刺突訓練は直接体験はされていませんね。それでも拳銃で、ですか初めて人を撃ったときに刺突を体験した初年兵と同じような心境になったことがあると聞いていますが、そのお話をしていただけませんか。

**稲葉さん**：実際に拳銃でそれをやった後は、私自身が殺した人の顔がいつも頭の中にあるのです。中隊本部から自分の中隊まで歩くときも、城壁の中を歩くときでも行き合う中国人が全て、自分に恨みを持った人間に見えるのです。常に拳銃の安全装置を外して、拳銃の手をかけてびくびくしていたのが現実でした。今考えるとそれだけ残酷

だったのだなあ、と思います。

**石田さん**：このような体験を経て、敗戦となるのですがそのまま完全武装のまま鉄道警備などについていて、なにかおかしいなと思いながら、それが次にお話しいただく山西残留に繋がる伏線になっていたということです。そして稲葉さんは「残留」という軍の動きに巻き込まれていくということになりましたが、そのことについてお話しください。

## 残留命令

**稲葉さん**：終戦後、復員の命令をずっと待ち続けていたのですが、46年2月に旅団司令部から中隊長が呼ばれました。「第1軍からの作戦命令を伝える」ということで「現在員の33パーセントの兵力を残さなければ全員の復員はできない」ということでした。各部隊は33パーセント残せ、ということです。当時高級参謀の今村参謀から言われました。私には名指しで「稲葉少尉、お前は将校の中では一番若いのだから、お前が真っ先に残らなければだめだ」「今、日本へ帰ってもアメリカに全部支配されている、中国には日本軍がまだまだ残っているし、山西を基盤にして巻き返す時期が必ず来る、それまで山西で兵力を温存して頑張っていないければならないのだ、そのためにお前は残れ！」ということを直接言われて「ハイッ！」と敬礼しました。この「ハイッ！」の一言で私の人生が狂ったのです。

日本軍隊の軍規はそのまま存続しています。決して反発はできません。「上官の命令は天皇の命令である」という仕組みがそのまま生きているのです。

それで「ハイッ！」の一言で私は残留組の指導者としてその場で命じられました。ということで山西残留となりました。

なぜこのような命令が発せられたかと言いますと、それは第1軍の指令長官である澄田暎四郎、参謀長の山岡道武と第2戦区の司令長官閻錫山の3人によって、協定が結ばれたのです。その時の閻錫山の腹の中は私が考えているように日本軍を残さなかったら、日本軍が戦争中に行った、焼く、殺す、奪う、強姦するなどありとあらゆる戦争犯罪を明らかにする。そうすれば全員は戦犯であり、戦犯として処置すると考えていたのです。

実際に澄田、山岡の二人も戦犯として拘留されていたのです。そこで二人が考えたことは日本の軍国主義と天皇制とその体制を維持することなのです。それは日本の国内ではアメリカ軍に支配されているので不可能である、山西では閻錫山が日本軍隊の存在を認めている、山西で祖国復興の基盤をつくるということ。2つ目はというより彼らにとってはこれが本当の目的なのですが、戦犯を釈放すること（自分たちのこと）、この条件が合致して初めて軍司令官の作戦命令として発出されたのです。

この作戦命令によって残留した兵隊は原平鎮というところに集結させられました。この集結を見届けて初めて閻錫山が復員の列車を動かしたのです。それまでは閻錫山が汽車を止めていたのです。軍隊を残すようになったから列車が動けるようになった、ということでした。それから残留部隊以外の軍隊の引き上げが少しずつ開始されたのです。これが残留問題に関わる事実なのです。

その時の命令によってもわかります。

(資料を示して)ここに第3旅団の名簿です。一番上に書いてあります今村高級参謀が司令官になっています。その外残留部隊の編成が書かれています。このように公表して残ったのです。私の名前もここに出ています。この中にはその後戦死した人も大勢います。その後全滅した部隊もあって、最終的に10総隊が再編成されました。その時の総指令が今村参謀であり、副司令が岩田参謀でした。最後の10総隊の指令でした。

その時には澄田暎四郎は山西軍の総顧問になっているのです。山岡参謀長は同じく山西軍の副顧問になっていました。彼らはそのような山西軍の重要なポストにいるのです。彼らによって10総隊がつくられて戦争の狩り出されるのです。実際に先頭の狩り出されるのは日本軍であって山西軍は第1戦には出ません。日本軍だけが戦闘で戦って、弾が尽きると相手が投げてきた手りゅう弾を拾って投げ返すようになって、そのうちに相手もタイミングを見計らって拾いに来た頃にまた投げてくるということで爆死させられて戦死者がどんどん増えていきました。

## 中国の「山西軍」に大和魂を

当時私は最初10総隊にいましたが、同時に進めていたのは山西軍の教育なのです。その教育隊で閻錫山直属の親衛隊で深造班という組織があります。その深造班の教育を頼まれて中尉、少尉クラスの何人かでその班の教育にあたりました。その時に閻錫山とも数回会いました。

その時言われたのは、この深造班の幹部を教育してくれ、ということでした。どのように教育したらいいのか、

ということについては「大和魂を植え付けてくれ」ということでした。

そこで考えたのですが「日本人ではないのに大和魂は植え付けられない、どうするか」と5人で相談して、とにかく彼らがぶっ倒れるまで訓練してそれに耐えられないのは大和魂が足りないからだ、ということで朝から夜まで銃剣術の稽古をトコトンまでやりました。へとへとになって倒れる奴は「大和魂が足りないからだ！」と言って皆でいじめたのです。こんな教育もやりました。

その教育が一段落した時に機械化部隊が新しく編成されて、私とその部隊の通信参謀に着きました。その機甲部隊は日本軍の戦車(軽戦車)の修理で、古くなったエンジンを自動車のエンジンに取り換えてスピードも出るようにしました。その戦車で河南作戦や晋中作戦に行きました。私も参謀長と一緒に晋中作戦に参加しました。晋中作戦に参加して、温李青というところで、私が一番仲のよかった工兵隊の少尉で隊の中隊長だった人で、激しい戦闘中でした。ますます激しくなることを見越して私と恩賜の煙草を分け合って一服吸って、立ち上がったところ脊髄貫通の銃創を受けたのです。私が彼を背負って後方の衛生兵のところへ行ったのですが途中で「俺はもうだめだ！」と「がんばれ!」「大丈夫だ!」と何回も励まして彼をおぶって歩いていたのですが、しまいには「お母さん」「お母さん」と言って死んでしまいました。私の最も親しかった中隊長もこうして戦死したのですが、「彼も無駄な死」だったですね。この晋中作戦もあちこちで敗北して、皆太原まで逃げて帰ってきました。

<解説>第8頁、左行の「河南作戦や」(下線)

を削除する必要があります。45年敗戦前のことですので、稲葉さんの記憶が前後していたのだと思います。

## 諜報機関で偽札使用

太原に戻ったところ、情報機関から私に文水(ムスリ)というところへ行け、と命令されました。そこは最前線に近いところで、そこで密偵を使って情報を集めて太原へ送れ、ということでした。そこで中国人の日常の会話を教わったり、特に日本人との習慣の違いなども教わりました。これだけは絶対の覚えて行け、と言われたことは洗面の仕方です。中国人は布団の上でも洗面器いっぱいの水で顔から体まで全部洗ってしまうのだ、とそのくらいのことは身につけないとだめだと言われました。

たしかに日本人は両手で水をすくって顔を洗うが中国人は水を含ませた手ぬぐいで顔を当てて顔の方を動かすのです。そのあとでしぼって体を洗うのです。こうして中国人は洗面器一杯の水で歯を磨いて、顔から身体全部を洗うのです。

このように中国人の習慣を即席で習って、文水県というところは入りました。

そこで中国人の密偵を使って情報を集めて太原へ送っていました。(注1：ここでは偽札を使用した。<稲葉さんのメモより>)(注2：後で、それは「登戸研究所で作成したものだろう」と姫田先生から説明がありました)

しかしそこも危なくなつてそこにいた部隊も太原に引き上げるので一緒に引き上げてきました。太原城内にいても危なくなつてきて、脱出を計って城外へ出ました。あの河を渡れば大丈夫だろうと判断してその河岸まで行きま

した。一人で脱出したので孤独でした。この河添いになんとか海岸まで出ればアメリカ軍がいるだろう、そこで日本人と分かれば日本へ帰してくれるだろう、と考えることがただ一つの生きる望みだったのです。

何とか生きて日本へ帰ろう、という気持ちで逃げました。河で顔を洗っていたら「誰呼！」（誰だ！）という声で上を見たら山西軍に取り囲まれていました。「俺は日本人だ、日本へ帰るのだ」ということを話して山西軍も日本人と一緒にだったので話は通じたのはいいのですが、密偵のときに使った偽札をもっていました。1年分くらい食べられるくらいの偽札をもっていました。それを山西軍に渡して、絶対に撃たないでくれということをお願いしました。そこでその兵は自分は撃たなければならない、撃たなければ後方の仲間から自分が撃たれてしまう、ということでした。そこで彼は弾が当たらないように撃つから、反対側から逃げろ、と教えてくれて銃声が鳴り響く中を死ぬような思いで必死に逃げました。的を外して撃っていてくれたのだろうと思います。

## 共産軍に捕まる

お百姓さんが畑仕事をしている姿が見えるところまで逃げて、「助かった！」と思いました。ところがその百姓たちは共産軍の民兵だったのです。ホッとしたのもつかの間、その場で捕まってしまいました。

そのとき「資源調査隊」（文水県で密偵を使ったスパイ組織）のパスポートを破棄するタイミングもなく持っていたのです。それをとられて、一人が読みあげて、もう一人が調書に書いて

た。政治部に送ると言われて、何日か歩いて政治部に着きました。政治部員から「俺は明治大学を出ている」「神田神保町で下宿していた」と聞かされました。私も「自分は日本の共産党員で岡野進は僕の先生だった」と嘘をつきました。翌日から、朝はちゃんとご飯も出るし、これはうまくいったなあ、と思ったのです。しかし、結局通信隊長だったことがばれてしまいました。

**石田さん**：稲葉さんの話の中心は「なぜ残留問題が発生したか」、ということですが、そのことへの理解を深めるために、今までのお話を少し整理しておきます。当時山西省に残っていた第1軍のトップクラスはみんな戦犯容疑者という扱いになっていました。そこで何とか捕まらないようにしたいという状況があったということが一つです。

国民党の閻錫山をトップにした軍閥の側も、戦争中から国民党や共産党軍とも微妙なバランスをとって勢力を温存してきたわけで、できれば日本軍を利用してそのまま、国民党からも一定の距離を置いて、共産党軍とは対抗しながらその勢力を温存して、支配し続けたいと考えていたわけです。

このように、日本軍側のトップと軍閥のトップの思惑が一致して、協力し合ってお互いが利益を得る、という関係にありました。そこで秘密の約束が交わされて日本軍の何割かの軍隊をそのまま残して、これから閻錫山が行う共産党軍との戦いに日本軍が協力するということが決められました。最初は15000人規模の軍隊を残す、という話の経過もあったようですが最終的には2600人が残留をさせられたわけです。稲葉さんはその残留組に組み

(スライド投影)ここに写真があります。残留部隊を特務団として第1団から第6団までに編成された内の第3段団の集合写真です。46年ころの写真です。旗が写っていますが、この旗は戦争中の日本軍の旗そのままです。軍の編成も装備も軍の中のルール(軍律や命令系統など)もそのまま引きずって、最初は共産党軍と戦う閻錫山軍を補助するということだったが、だんだんと閻錫山軍に変わって共産党軍と戦うというかたちが変わってきました。

次の写真は46年ころに第2軍が行軍している写真だそうです。その次は八路軍との決戦に備えたトーチカです。武器弾薬を蓄えることも出来るような大がかりな陣地構築が行われました。これはおそらく47年ころの写真だと思います。

この中に日本軍も入って戦う訳ですが先ほどの話の晋中作戦という大きな戦闘に負けます。これ以降日本軍と閻錫山側は負け続けて、省都の太原に引き下がっていくことになるのです。

その中で稲葉さんは、最初は教育係という話がありましたが、やがて「資源調査」というもっともな名前でスパイ派遣の機関で、通信隊の隊長だった稲葉さんはそのトップクラスの役割を果たしながら共産党軍の情報を集めて報告していました。そこも危なくなつて太原に戻ってきました。

1949年、その首都太原も陥落する状況の中で稲葉さんは脱出をはかったわけです。こうして最期は共産党軍に捕まるのですが、4年弱の間日本軍としての戦争を続けてこられました。

## 太原戦犯管理所へ

このあとは、撫順戦犯管理所と同じ

ように山西残留兵の捕虜を収容するための太原戦犯管理所に稲葉さんは収容されました。そこでのお話しをさせていただきます。

**稲葉さん**：いま言われた中で少し補足します。山西残留の実際の中で私たちが原平鎮に集まったときは、装備が全部新しく取り替えられました。「一番いいものを持っていけ！」ということでした。衣服は新しく、食料も3年分、弾薬も3年間くらいは使える量が渡されました。それにお札の「元」も渡されたのですが、実際は使いものにならないのです。銀貨は純銀なので、これだけは使えました。みかん箱にぎっしりと詰めて、床下に一杯しまっていました。これで3年間がんばればまた日本軍が戻ってくるのだから、とにかく3年間はがんばろう、ということでした。「3年」と言われていました。軍の命令だったからこそ軍の装備を「3年分」として渡されたのです。

これから、太原の戦犯管理所についてお話します。撫順の場合と少し違うことは、私の場合捕虜になって捕まって最初連れて行かれたところで「お前たちが壊したのだから」と、破壊された道路の改修工事をやらされました。砂もすぐに凍ってしまうような寒さの中で、セメントで手は荒れるし、本当に苦しい作業でした。その厳しさに耐えられず、私は再度逃亡を図りました。だがまた捕まって、今度は永年と言うところへ連れて行かれました。

永年の収容所での「思想改造」は労働による「改造」でした。その労働はコルホーズでの農作業でしたが、1列に並んで麦刈りを行うのだがはるか向こうで、ここまでと言われて一日中どんなにやっても遠すぎて届きません。

綿つみ作業でも同じです。大雨が降って洪水の恐れがあると言って土砂降りの中、裸で土嚢築きもやりました。

永年では大きな建物がないので演舞場を造ることになって、その建物をみんなで作らされました。やぐらを組んでの作業でした。その作業の最中に「いまから名前を呼ぶ者は前へ出ろ！」と言って呼ばれた名前に私も入っていて、その場で手錠をかけられるものもいました。トラックに載せられて駅へ着いたら貨車があって、貨車の中に藁が敷き詰めてありました。そこに押し込められて、戸を閉めた上に貨車の回りは銅線でぐるぐると巻かれて、最後は銅線をねじって、戸も開かないようにされました。

## 処刑の恐怖

こうなると、これからどうなるのかやはり処刑への恐怖が沸いてきました。どこかへ連れて行かれて処刑されるのではないか、という恐怖だけしか残っていませんでした。こうして連れて行かれたのが太原でした。そこは日本軍が造った監獄で、その独房に入れられました。4畳半くらいの部屋に大体6～7人ずつくらいに入れられました。部屋は格子がはめられた高窓が一つあるだけで、その鉄の格子がわれわれは吐く息が凍って張りついて、しまいにはその窓が塞がってしまうというような状況でした。トイレは1日に2回、各班ごとに連れ出されて、穴を掘ったところで一列に並んで「はじめ！」の号令で開始して、「終わり！」の号令で終わらせて独房へ戻る、ということでした。

ここに入ったときから一切話をし

た。正座して反省していること、という命令しか与えられていないのです。食事は唐辛子で煮込んだような大豆が5粒くらい乗っている粟のご飯、一膳めしですが、それは3度3度食べさせてくれました。トイレが我慢できないときは部屋の隅にかめが置いてあってそこに用足しをする、ということでした。もしも夜中にトイレにでも行くとしたら、狭すぎてもう寝る場所はなくなっているのです。しかたがないのでみんなの上に乗って寝ると、みんなも少しずつよけて隙間に落ちるようにして寝場所を確保しました。こんな状態ですごしました。

口を利くのは、調べるために呼び出されてその部屋に一人ずつ呼ばれて話しをするときだけでした。そのときに担当したのは日本人の佐藤峰男という職員でした。ここに入れられたときから、処刑されることしか考えていないし、話すことも、喋るだけ喋らせて最後は処刑されるだけでとっていました。だったら最初は喋るもんか、という反抗的な態度をとっていました。そのころはいつ処刑されるか、という恐怖心だけしか無かったので、たまに外で「パン、パン」と音がすると誰かやられたのだろう、という考えしか起きませんでした。

## 3年も過ぎて

### ようやく反省の途へ

それが、職員の説明を聞きながらそうではないとようやくわかってきたのは3年過ぎて、4年近くになってからです。だんだんと、まじめにやれば殺されなくて済みそうだ、うまくすれば帰れるぞ、という思いが変わってき

ました。そのころに反省文を出すと「以前の反省文とはまったく違うよ、もう少しだ」と言われました。お前はもっと書かなくてはならないことがあるのだ、もう少し考えなさい、あなたの写真は各部落の人たちに渡してあってあなたがなにをしてきたのかは全部わかっているのですよと、自分でしたことを素直に思い出して書きなさい、そうすればあなたにはそれだけの恩恵があるのですよと懇々と諭されました。

それから考えも変わってきて、自分の罪をある程度認めるようになりました。少しずつ認めるようになったのです。それでもやはり、俺は1銭5厘で狩り出されてきたただけだ、ずーと上の人たちが戦争を起こしたのだ、俺たちは使われてきたただけだ、だから俺たちが裁かれるのは納得いかないという気持ちがありました。まだ自分の罪に対する逃げ口上を考えていました。

こうしたことが何回も繰り返しながら4年を過ぎたころに、ようやく自分は重要な犯罪を犯したのだ、ということがわかってきました。そこではじめて今度は罪を認めるという段階から、罪に対して謝罪をするという考えに変わってきました。そのときに初めて処刑されることの恐怖心から一転して、これだけのことをしてきたのだから処刑されてもやむをえないのだなあ、という気持ちになって、今度は朗らかな気持ちになりました。「朗らか」というのは正確ではありません。自分の気持ちが大きくなったのです。

そうすると、あとは怖いものはないのです。そこからは自分のやってきたこと、反省をより深く勉強するようになってきました。こうして「認罪」から「謝罪」へと進展してきました。このように「思想改造」というのは決して彼らに強いられたものではなく、自

分で求めてそこに到達したときに初めて思想改造ということになるのです。鬼から人間に戻ってきたからこれがわかったのです。自分でも人間に戻ったことを実感しました。

そのころになって、日本から赤十字社の訪問があったり、待遇も変わって音楽活動や、体育活動などが取り入れられました。さらには中国全域にわたって参観旅行に行かせてくれました。だがこの参観旅行は私たちにとっては謝罪旅行でもありました。中国人民への戦争中の罪のお詫びをしてきました。

## 即日釈放、即時帰国

最終的には太原で軍事法廷が開かれて、その法廷で裁きがありました。そこで私たちは第1回目として、約20名を不起訴処分にする、ということで「即時帰国」の命令をもらいました。そこですぐその裁判の会場で、それまで着ていた下着から全て脱いで、用意されていた新しい衣服に着替えました。看守の人が着替えを見守りながら、今まで身につけていたものは「戦争犯罪者の衣服である。たった今からあなたたちは釈放されて、日本国民であり、日本人民である。したがって今までの衣服は一切着用する必要はない」と言われて、そのまま食堂へ連れて行かれて葡萄酒で乾杯してくれました。そしてその足で天津へ向けて出発しました。みんなで太原の収容所にあいさつにいきたいと申し出たのですが、「あそこは、犯罪者の行くところであって、あなたたちはもはや犯罪者ではない、したがって行く必要はない。許可をしない」と断られました。徹底していました。こうして釈放されて日本へ帰ることができました。

帰国後のことは次にお話しします。

<解説>第12頁、右1行の「不起訴処分にする」(下線)の部分は正確には「**起訴免除処分**にする」です。

中国側の考えは、戦犯たちは「有罪だけれど、起訴しない」ということです。この点については、李楼さんが撫順戦犯管理所からもらってきた資料にも関連の記述があるはずですが(私の手元にも釈放後の資料があり、わざわざ無罪でも不起訴でもなく、起訴免除だと説明してあります)。また、発行したばかりの岩波新書『中国侵略の証言者たち』にも「起訴免除」と記述してあります。

**石田さん**：少し長くなりましたのでここで休憩を入れさせていただきます。

<休憩後>

## 撫順との若干の違い

**石田さん**：先ほどの稲葉さんの戦犯管理所時代のお話しに少し補足させていただきます。捕虜になって最初に収容された永年という場所ですが、そこには元軍人だけではなくて、日本人技術者や家族も含めて永年の軍事訓練団に収容されました。ここでは労働、学習、坦白が行われました。撫順でも学習や坦白もあったのですが、労働があったことが撫順との大きな違いでした。

撫順の方たちは労働と言うことではシベリアで充分すぎるくらいやらされていましたから、ということかも知れませんがこの労働について稲葉さんは詳しく触れませんでした。同じ体験をされた何人かにもお話しを聞きました。労働の中で自分たちが壊してきたものを修復しながら、道路も建物もどんなにたいへんな労働によって造られてきたのか、自分たちが奪った作物は

ということを実感して、そこから反省が始まったということも聞きました。

この永年に2年弱ぐらいいまして、そこにいた軍人の中でもっとも反省をしていない人、その100数十名が別グループにまとめられて、その人たちが太原戦犯管理所へ移された、ということだそうです。階級が高かった人たちや、坦白がまったく進んでいなかった人たちが分けられました。稲葉さんもそのうちの一人ということになります。稲葉さんの場合は通信隊の隊長だったという実績もあって太原送りとなったのです。

太原では、永年でやったことと同じように自分のやったことを紙に書き出すということ、自分の罪を認めるという段階から口裏を合わせないためお互いに私語は禁止、という時期が続き、太原では本当に最後の時期までほとんど話ができなかった、と皆さん仰っています。これも撫順との大きな違いなのでしょう。

太原に入ったときからすぐに紙を渡されて、毎日自分のやってきたことを書き出す作業をやらされた。それが全期間4年間のうちのはじめの2年間はずっとそればかりやらされました。稲葉さんが先ほどお話しになったように、自分はどうせ処刑されるだろうと考え、恐怖心も重なって自分の罪を認めるような内容は書くことができなかつたように、多くの方もやはりそうだったようです。2年間と考えるだけでも私たちにとってはゾッとしますが、ひたすら書き続けるということでした。こうしてようやく取り調べの段階に入るのですが、その取り調べからは撫順の場合とかなり似てきています。

中には早い段階で罪を認めて、認罪された人もいたようですし、最後の最後まで認罪しなかつたような人もいた

ようでかなりばらけた状態があったそうです。そのあたりは詳しく話す時間はありませんが、撫順とちがうところは他にもあるようですのでその部分も話ができればしていただきたいと思います。

ここで面白い写真があります。ご本人はあまり記憶が無いようですが、太原戦犯管理所で最後の1年くらいの人にバスケットボールをしている写真です。ご本人はバレーボールはやった記憶があるが、バスケットボールはやったことはないなあ、と言っておられるのですが、一緒にいた他の人たちも「これは稲葉さんだ！」と仰っているので、間違いないと思います。ともかくこのように最初は厳しかった太原も最後の方では和らいで、撫順と同じようにレクリエーションなどを取り入れた管理が行われました。こうして起訴免除、即時釈放となり、参観旅行などを経験されて帰国されたわけです。その帰国の際の興安丸での写真にも稲葉さんが写っています。

ところで撫順に比べて太原の場合は、建物も残っていないし、資料も残っていないし、人数も130人と撫順よりは大幅に少なく、十分にわかっていない部分が多いのです。

最後に稲葉さんが帰国して以降、どのような活動されてこられたのか、いまもどのような活動をされているのかについてお話しをいただきます。

## 冷たい態度で迎えられての

### 帰国

稲葉さん：中国の寛大政策によって釈放されて日本へ戻ってきて、舞鶴の収容所に入ったときにたいへん寂しい思

いをしました。これだけ国のために尽くして、戦争の責任をとって謝罪してきた我々に対する態度は何だ、と思いました。態度が冷たいのです。家族だけは暖かく迎えてくれました。

それぞれの地区に別れて帰ってきました。私も東京地区の集団の一員として帰ってきました。そこで驚いたのは私たちは「現地除隊」したことであったことでした。軍隊として帰ってきたわけではないと言われて、そんな馬鹿なことはない、ということで私たちは厚生省へ行きました。厚生省の引き上げ援護局へ行って、課長とも会って確かめました。ところが厚生省が保管している「戦時名簿」を見せて、私の名前の上に「現地除隊」の赤い判子が押してありました。「現地除隊など誰も認めていない」と抗議したのですが、「あなたたちの言うことはわかるがどうにもならないのです」ということでした。そのとき以降はもう相手にしてくれませんでした。

それだけではないのです。私たちに對して、「赤い思想」を吹き込まれた「中共からの回し者」だ、と公安警察につけねられたのです。私の父親にも「息子さんは中国共産党の洗脳教育を受けたアカです、変わった動きはないか注意してください」と言ってきたのです。他の人もみんな尾行されたり、聞き込みをされたりしてつけ狙われたと証言しています。このように敵対的な態度でしか迎えられませんでした。

こんな理不尽なことはないと国会でも2回証言しています。裁判でも訴えてきました。しかし全部却下されました。最高裁でも却下でした。ということは我々が何を訴えても聞いてくれないということです。軍司令官の澄田睐四郎と参謀長の山岡道武の二人の言うことだけは聞いているのです。彼らは

帰国後、私たちは一人も残していない、と証言しているのです。「みんな帰れ、と説得したのに、説得を聞かずに2600人の人たちは勝手に残ったのだ」というのです。私たちは「脱走兵」にされてしまったのです。

厚生省も裁判所も第1人者の言うことは間違いがない、という態度です。ではわれわれの主張はどうなのか。一切無視されました。実際に彼らが各部隊をあちこち説得して歩いたと言うが、私はもちろん、誰もそんな説得は聞いていません。そもそも彼らが説得して回るなんてするはずがないのです。戦犯として拘留されているのに、なぜそのように回れますか。閻錫山の方針に従って、残すことを説得するためならば歩いたかも知れません。戦犯である身の司令官が囚われている閻錫山に逆らって帰国を説得して回るなんてするはずはありません。戦犯である自分が帰国するために工作のチャンスを見逃すはずはありません。

最後にアメリカの飛行機に飛び乗って帰る時も、帰ったら義勇軍2万人をすぐに連れてくる、それまで岩田参謀のもとで頑張っていてくれ、と言って逃げたのです。アメリカの飛行機で台湾へ飛んで、台湾経由で逃げ帰ったのです。こんな事実がありながら、国会で「誰も残していない」と証言しているのです。

彼らは何を恐れていたのか、ということですがそれはポツダム宣言に違反したからなのです。それが明らかになるのが怖いのです。実際には残ったものはほとんど戦死しているだろう、最終的に八路軍に太原を攻められれば、最後に残ったものはみんな自決するだろう、とそうすれば「死人に口無し」だということを願っていたのでしょ<sup>15</sup>う。

ところが後から帰ってきた兵隊たち

が「軍命だった」ということを証言し始めたので、事実と違うことを言って押し通しているのです。だからわれわれの主張は国会でも裁判所でも聞いてくれないのです。偽証言の参謀長と軍司令官の言葉だけしか信じないのです。これが現在まで続く問題なのです。

## 真実の歴史を明らかに！！

私たちもこのような日本帝国主義のポツダム宣言を踏みにじった陰謀に対して、日本の誤った歴史をこのまま見過ごすことはできません。真実の歴史を見つめてもらいたい、そうしなければまたあのような誤った戦争が起きるのです。

だからいまも中国への戦争は「侵略戦争ではなかった」と大学の先生まで言っているのです。徴兵制の話まで出ているのです。

これは兵隊のことをなんとも思っていない、また人を殺すことをなんとも思わない兵隊を軍国主義者が求めているということです。戦争への道を歩もうとするなにものでもないと思います。だから私の年になって、“穏やかな爺さん”でいたいのです。年のせいで、こうして話していてもすぐには発言内容が浮かんでこないのです。それでも自分で話さなければならぬと思っています。もう何年か後にはこのような話をできる人はいなくなります。でも、「受け継ぐ会」ができて、受け継ぐ会の人たちの努力によってこうしてみなさんが真剣に聞いてくださっています。

受け継ぐ会の方々の努力によって、歴史の真実を明らかにするための最後の請願書ができました。皆さんにも協力をお願いして署名を集めて国会へ出そうと考えています。これは単に恩給や

遺族年金をくれ、ということではありません。戦死者家族への補償を要求したり、靖国神社へ祀ってくれと言っているわけでもありません。

お金の問題ではないのです。お金の問題だけについて言えば、帰国後澄田 暎四郎の家へ行ったとき彼はなんと言ったか。「お前たち、そんなに金が欲しかったら台湾へ行け！ 俺が手紙を書いてやるからそれをもっていけばお前たちが一生食べるだけの金をもらえようにしてやる！」とそこまで暴言を吐かれたのです。お金だけの問題ならばそれと同じです。

我々が言っているのはそういうことではありません。日本の帝国主義が本当の歴史を隠して、誤った道を歩こうとしています。その誤りを正して真実の歴史を証明し、後世に伝えたいということのために今回の新しい請願をしたいと考えているのです。改めて皆さんのご協力をお願いします。(拍手)

**石田さん**：特に補足することはありません。張さん、何か補足はありませんか。

**張さん**：補足することはありませんが、実体験をされた稲葉さんのお話は本当に貴重なお話でした。このような歴史を知るということだけではなくて、こ

のような歴史がいまでも続いているのです。彼らにとっては山西残留ということが単なる歴史ではなくて、今も生きて現実が私たちの前に横たわっているということを改めて感じました。私たちも市民団体の人たちも、この知識をもっと深めていくことも大切ですが、戦犯管理所での体験を通じて、いかに人間性が変えられるものか、人間性を取り戻せたのか、ということについて詳しい話はできなかったがそのことももう一つの学ばなければならないことだなあと聞き取り調査をしながらいつも思っています。

お互いにこの知識をもって対話を深めていく必要もあります。だが同時にお互いに批判し合うことも大切だと思っています。緊張感のない対話では、戦犯の皆さんもそうだったのですが変わりません。批判することは敵対のための批判ではなく、高めあっていくために批判が大切だと私は思っています。今後も皆さんとともに学び合いながら、批判し合いながら成長していきたいと考えています。自分の周りだけでなく、一人ひとりの力は小さいが、皆で力を合わせて批判しあって大きな力に発展させていくことができると思います。そのような生き方を私はこれからはしたいと考えています。今後ともよろしくをお願いします。

\* 文中、7ページ、及び12ページに〈解説〉は、本紙発行後、張さんから指摘のあった部分です。読者の方々により正確に理解していただくために、下線部分は訂正せずに〈解説〉として挿入しました。